

民生教育常任委員会会議録

- 1 日 時 令和7年8月25日(月)
午前9時58分～午後0時2分
- 2 場 所 第3・第4委員会室
- 3 出席委員 委員長 小野寺美穂 副委員長 大友 康信
委員 阿部 正義 委員 佐藤さやか
委員 佐藤 繁樹 委員 長南 良彦
- 4 欠席委員 委員 熊谷 克彦
- 5 説明のため な し
出席をした
者の職氏名
- 7 事務局職員 主 事 高橋 桃花
- 8 付議事件
(1) ひきこもりの現状と課題について

午前9時58分 開 会

○委員長（小野寺美穂） 出席委員は定足数に達しておりますので、委員会条例第14条の規定により委員会は成立いたしました。

ただいまから、民生教育常任委員会を開会いたします。

これより、本日の会議を開きます。

本日の会議は、お手元に配付の委員会次第書のとおりであります。

この際、諸般の報告をいたします。

熊谷克彦委員から、会議規則第81条の規定により欠席する旨の届出がありましたので、報告いたします。

次に、本日の会議に係る資料をお手元に配付しておきましたので、御了承願います。

以上で、諸般の報告を終わります。

それでは、付議事件の（1）ひきこもりの現状と課題についてを議題といたします。

これより現地調査を行ってまいります。

現地調査終了まで、休憩いたします。

午前9時59分 休 憩

*休憩中の要旨

○ひきこもりの現状と課題について

フリースペースなどにおいて、社会福祉法人わたげ福祉会の秋田敦子理事長、フリースペースなどの責任者である藤森邦枝様、同じく支援員である水口真美様より説明していただき、その後に質疑応答を行った。内容は以下のとおり。

（1）「わたげ」の活動について

「わたげ」は、NPO法人わたげの会と社会福祉法人わたげ福祉会の2つに大きく分かれている。元々はNPO法人わたげの会が仙台市太白区にあり、29年目になるが、初めは古い民家で就労支援を行っていた。初めに1人が市外から通うようになり、通う方が四、五人になった頃、理事長は元々、障がいのある方や高齢者へのボランティア活動を長く行っていたため、そこに連れて行って手伝ってもらったりもしていた。そのうち、通う方が40人くらい

になった頃、ひきこもり支援のガイドラインを作成するという事で、厚生労働省から声がかかった。

厚生労働省の職員の中に民間として1人入って3年間毎月通い、ひきこもりの心理的なものやその背景、家族支援が大事で、家族をまず楽にしてあげることなどを訴え、まずは暫定版ができた。そのような活動をしていると今度は仙台市から声がかかった。その前に仙台市を訪ねたことがあったが、20歳を過ぎたひきこもりの話をすると、それは親の責任、本人の怠けだと嫌な顔をされた。これは言っても無駄だと思い、独自にボランティア活動を行っていたが、その5年目、ガイドラインの作成のために厚生労働省に行き始めた頃、200万円を補助してもらえることになった。その際には、専門家や学校の先生ではない、身近なお兄さんお姉さんといった素人のほうがよかったため、専門家に来てもらうなどの条件は付けないようにした。

そのような活動を続けてNPO法人を立ち上げ、国や県で行う事業移行補助金など全てに手を挙げ、何年も活動してきた。そのような実績を見て行政が補助してくれるようになった。また、ニーズが増えてきたときに、障がいがあってもどうしても医療が必要な人もいたため、社会福祉法人も設立した。

(2) NPO法人わたげの会の活動

・宮城県ひきこもり地域支援センター南支所

仙台市のひきこもり地域支援センターを窓口とする相談支援センターである「ほわっと・わたげ」と共に相談支援を行っている。

・学習サポートハウス

中学校は卒業しているが、16歳や18歳、20歳を過ぎていても学び直したい人が学び、取りたい人は高卒認定を取り、その後専門学校や大学、大学院にまで行く人もいる。元々真面目で優秀な人も多いが、どうしても過敏だったり精神的に緊張しやすかったり、勉強は頑張りたいけど人間関係がうまくいかず、就労や大学生活でつまづく人もいる。大学に入ったけれど、集団ということでゼミに出られず、休学のままアパートにいる人から、就活や人が怖いという相談もある。このような人で優秀な

人材がたくさんいる。障がいがあってもいい、あなたはどう生きていくのかということを中心に問いかけている。

- ・らしくワークサポーター

県と日本財団が協力し、障害者手帳を持たない人を対象に令和6年から支援を行っている。働く練習は障がい者の移行支援の事業所を使わせてもらいながら、自分に何が向いているかをトレーニングして就労につながる活動をしており、多くの地域から人が来ている。生活保護費をもらっている若者が多くいるが、それは国の損失になる。ただ、本人としては働くと生活保護費が減ってしまうため、働かずに保護費をもらう選択をする若者が増えてきた。本人は、自分はひきこもりではないと考えているため、わたげのような引きこもり支援の職員が訪問しても絶対に会えないが、保護費をもらうために生活保護の担当者とは必ず会うため、担当者と共同で行動し、保護費は半分にして、半分は働いて手にしようとして働きかけ、そこで「らしくワークサポーター」に通う人もいる。誰でも自分で汗をかいてお金を手にして、達成感を得ようという関わりをしている。

- ・フリースペースなとり

※（４）フリースペースなとりについてを参照

そのほか、第2フリースペース、メゾンわたげがある。

（３）社会福祉法人わたげ福祉会の活動

- ・わたげの家

障害者手帳を持たないグレーの人たちが集団の中で自信をつけて強くたくましくなっていく支援をするための寮。九州地方など全国から来ている。短期でも寮生活を経験すると規則正しい生活ができ、やはり社会生活の時間に合わせていくためにはある程度の決まりが必要で、それも1人ではなく仲間がいて、みんなで一緒に掃除し、食器を洗い、洗濯を

する。フリースペースなとりからも、2名が寮に入っている。自宅にいるとどうしても、自分の過ごしやすいように過ごして、毎日が自分の好きな時間になってしまう。洗濯も料理も親任せでしたことがない人もいて、寝る時間は午前中、起きる時間は午前10時や11時という生活を続けていたら何も変わらないし、親もどうしても甘くなってしまうため、寮に入ったほうが変化が見られやすい。そして、ちゃんと自分の将来を見つめるようになる。

- ・フルハウス

障害者手帳を持たないグレーの人たちが集団の中で自信をつけて強くたくましくなっていく支援をするためのグループホーム。

- ・わたげの樹

障害者手帳を持たないグレーの人たちが集団の中で自信をつけて強くたくましくなっていく支援をするための就労継続支援B型。県内で2番目に工賃が高く、平均月3万円である。そのまま障がい者枠で働く人もいれば一般就労に行く人もいる。今、二十何人が仙台厚生病院で週に1回働く練習をしており、それが2回、3回になり、5日間働けるようになると、ほかの仕事をするか、病院で正社員として働いている人もいる。

- ・ほわっと・わたげ

仙台市のひきこもり地域支援センターを窓口とする相談支援センター。

そのほか、ホライズン、ここにいるよがある。

(4) フリースペースなとりについて

県のモデル事業で令和2年度から約6年間、支援を行ってきた。元々、県としては3年間を想定しており、その目的は身近な市町村への居場所の設置であった。実際に市町村でそのような施設の運営を行うとなった際に、ひきこもり支援のノウハウがないため、わたげに協力をお願いがあって、市町村

への居場所づくりのノウハウを伝達するという目的があつてここにできた。しかし、いまだどの市町村も手を挙げないまま、最後の年度を終えようとしている。

現状だけを見るのではなく、本人が社会で生きていくために必要なものを提供するという流れをつくっているが、フリースペースなとりはほかの施設と比較して一番駅から近く、拠点である八本松からも電車に通えて便利だということで開設した。名取市で支援を継続できれば、電車もあり、送迎もでき、つなげるという意味ではこの立地条件が非常によい。このまま県からの補助が終了すれば継続できないと考えていたが、本日名取市の議員が来ることとなり、関心を示していただけて嬉しく思っている。

現在、責任者と支援員の2人体制で週3回の活動を行っているが、いろいろな仕掛けや工夫のためにはもっと職員が必要である。ここを居場所として集まって終わりではなく、居場所を通じて自分の力を取り戻し、自分で決断をしながら社会を目指す流れをつくり、つないでいくことが仕事である。

大崎市古川にある精神保健福祉センターで支援をしていた際にアンケートを行ったところ、名取市にはひきこもりがゼロという結果だったが、センターに来ている名取市民も多くおり、理事長が訪問している方は那智が丘地区やゆりが丘地区などにもいるため、市内に多くいるように感じる。フリースペースなとりの市民の利用実績は、令和2年度の開所当初と比較して増加してきている。全体の利用実績と比較しても大半が名取市民であり、実際の登録者数は13名である。また、登録には至らないが親だけが相談に来たり、本人が来たいときに来るケースが11名で、合計で30名弱の方が利用している。利用者の年代にばらつきはあるが、10代では中学校から不登校でそのまま進学せず、行く場所がないケース、高校には進学したが高校でやはりうまくいかないというケースが多い。20代、30代では、一度働いた経験はあるが、そこで体調を崩してひきこもりになったというケースが多く、40代、50代では、働いた経験はあるが、20代、30代で辞めてからひきこもっているケースが多い。また、このような居場所があると知っても、実際に動くまでは悩む方が多い。本人も家族も、早くても1か月で動きはじめるが、半年や1年悩む方もいる。

居場所づくりについては県から毎年提案があったと思うが、市民の方がたくさん来ているので、ぜひ名取市に手を挙げてもらいたい。

不登校状態の生徒が中学校を卒業後、進学先は決まっても通っていないことが多くある。人に慣れていないため通学が難しく、そのような人が相談に来るのは20歳を過ぎたころである。保護者もどうしていいかわからず、相談先は教育委員会ではないため役所や保健所、病院に相談するが、本人は出てこない。しかし、それは自分の力でなんとかしようと頑張っているが、1人だとどうしたらいいかわからない。わたげの施設のような場所にたどり着けない人たちが、8050問題につながっていると考える。地域相談会を開催することもあるが、高齢の保護者の方はなかなか来れないため、近くに出向いて来ていただいている。本人は、人と一緒にする楽しい経験や働く経験など、失っているものが多くある。そのようなことを経験して自分で決断して社会に出ていくと、本人たちは楽しそうにしている。ただ、そのような経験のためにはわたげの職員だけでは補えないため、地域の方や議員など、大人が目線を変えて、社会を変える必要性を感じてほしい。現在、人材不足ということで海外から人が多く入ってきているが、社会に出てきていないだけで、日本にもまだ人材はたくさんいる。そのような人をなんとかできるよう、生まれてきたことを大事にする活動を広げているが、ただ働かせるのではなく、心の中を知り、勇気づけて、たくさんの経験をさせて心豊かにしてあげる、そこに皆さんの協力や理解があると、彼らの生き方は変わると考える。そういった人をしっかり把握し、地域の方に関心を示していただき、一緒に活動してほしい。

(3) 質疑応答

問 お話しいただいたような支援活動に対する補助は手厚くあってほしいが、年間どれくらいの予算があれば持続可能なのか。

答 明示はできないが、現在常勤の職員2名で実施しているが、電話対応や相談対応もあるため四、五人は欲しい。また、家賃が高く、遠くから依頼があった際にはガソリン代などもかかり、赤字分を法人で埋めているという状況である。もし予算が増えたら、人を支援するためには一対一

- の面談だけでなく、活動に幅を持たせるため、別の施設から男性スタッフが助っ人として来ることもあるが、若手の男性スタッフもいてほしい。
- 答 女性スタッフは定着してきているが、社会に出るためにはいろいろな人に慣れておく必要がある。また、通うメンバーにスタッフの選択肢を持たせるという観点からも、様々な年代や性別のスタッフが必要と考える。
- 問 先日名取市役所の職員がこちらへ伺ったとのことだが、そのような話をしたのか。
- 答 そのときは情報収集という話だったため、現状としてほかの市町村でも取り組んでいる旨やぜひ手を挙げてほしいということはお伝えしたが、そのような話にはならなかった。
- 問 県のモデル事業としては、令和7年度で終了ということになるのか。
- 答 先日問い合わせたところ、そのような話をされた。
- 問 県からの支援が終了すれば、今後継続するためには違う形での支援が必要になるのか。
- 答 市町村からの支援が必要である。元々、県の計画では市町村で居場所づくりなどの支援を行ってほしいという目的で令和2年度から3年間のモデル事業を始めたが、手を挙げる市町村がないため、さらに3年間延長されたもので、それが令和7年度末で終了ということである。
- 問 先日市の職員が伺った際に、その話はしたのか。また、回答はあったのか。
- 答 先日は現状調査ということだったので、具体的な回答はなかった。新年度予算は大体9月に固まってくると思うが、障害も教育も労働もあるため、令和8年度予算に計上するとしてもどこから支出するかというところも大変だと思う。関係するところから少しずつ出していただけるといいと思う。現在は、居場所に来られない人のためにオンラインで居場所をつくったりすることもあるが、予算をどこから出すかが課題である。全国ひきこもり家族会連合会からは、全て障害から支出してほしいと議員が国へ訴えている。早めに相談できる場所、まずは親を支援できる拠点があればいいと思う。
- 問 説明の中で、仙台市からは1,600万円の補助があるとのことだったが、ほ

かにもお金をかけていることを考えると、それくらいは出てほしいということか。

答 現在、物価高騰が続いているにもかかわらず、仙台市からの補助は約20年変わらない金額である。社会福祉法人は国からの国庫補助であるため毎年増額しているが、NPO法人に関しては金額が決まっているため、変わらない。今後日本を背負っていく人たちが社会で働けるようになるよう、財源の使い方を真剣に考えていかななくてはならない。社会に出て働くに当たり、選択肢のことを考えると、できれば十五、六歳の頃からつながるべきである。小中学校までは教育委員会で見守ることができるが、それより先は追跡することができず、これは縦割りの壁が大きく、福祉と教育が連携して、教員の負担も軽減していければいいと思う。

問 仙南地区では、ひきこもり支援に関してなかなか市町村からの手が挙がらないとのことで、調べてみると県内では富谷市で自立相談支援センターを設置し、一般社団法人に委託している。また、精神科医による相談事業も実施しているとのことだが、県南でわたげ以外に委託して取り組んでいる市町村はないのか。

答 岩沼市でNPO法人に委託してひきこもり支援事業を実施しており、法人の方がわたげに相談や勉強に来ているが、家族支援まではしていない。富谷市も一般社団法人に委託して支援事業は行っているが、医療とつながるところまではきていない。わたげは、仙台市太白区八本松では医療と連携しており、検査するところもあるが、その前にまず親が来られる環境、親がほっとできる拠点がある。大崎市古川の精神保健福祉センターのように、役所の中にフリースペースがあるところもある。

問 継続していく上でも、若い人や男性の職員が必要など、やはり課題が出てくるのか。

答 運動などいろいろな経験をさせるためには、性別も年代の様々な職員がいたほうがよい。

問 お話しいただいたようなケースに当てはまる方が身の回りに実際におり、現にそのような相談も受けている。その中には8050や9060ではなく、5020や6030といった年代の方もいる。こここのところ、ゆとり世代と言われて

いる世代の人達、それこそ知っている子の親から、就職したけど家にいるという話を聞くことが多いが、やはり増えているのか。

答 そのような人は多いと思う。社会や環境が変わり、嫌だったらやめてもいい、簡単に仕事を変えられる、いろいろな職種の仕事をできる自由がある、このような自由があることはいいことだが、責任や継続、忍耐力ということがどうしても言われるようになる。中小企業同友会で話を聞くと、風邪をひいて休むときも辞めるときも、本人ではなく親から電話がくる。叱っているのではなく教えているだけなのに、叱っていると感じてすごくショックを受けてしまう人もおり、様変わりした時代だが、なんとか仕事を継続できるようにしていかななくてはならない。仲間と過ごすよりも一人でいることを好む人がいるが、どこかで寂しさを感じているはずである。わたげの職員は、一度原点に戻ってやってみるということで頑張っている。

問 フリースペースなとりについて、開設時間は月曜日・水曜日・金曜日の午前10時から午後3時までとのことだが、誰も来ていなくてもその時間内はいつでも開いていて、来てもらえる環境を整えているのか。

答 誰でも入ってこれるようにしている。

問 親が来てもいいのか。

答 親にもぜひ来てほしい。そして安心してほしいし、諦めない気持ちを持ってほしい。

問 利用料はかかるのか。

答 活動は実費で、何か作ったときは参加者人数で割ったり、どこかに行くときには自分で支払っている。

NPO法人は本当は無料にしたいが、維持費やいろいろな体験をさせるための車やガソリン代がかかるため、月謝制としている。あまり安くすると2回目以降来ないこともある。家庭環境によっては出せないといった相談には応じていると思う。

問 市の職員が訪問したとのことだが、県からの動きといった話はあったのか。

答 私たちがなかなかできなかった名取市の活動のために、県がここまで予

算づけをして、元々3年間だったものをさらに3年延ばしてくれた。元々は県の事業であるため、中間就労やグレーの人たちを救うため一生懸命動いてくれた。

問 市からも聞き取りがあったと思うが、基本的に県でも市にプッシュしていくなどの連絡はあったのか。

答 明確には分からない。私たちも最初は一、二人からスタートしたが、今ではもう何千人も卒業者がいて、みんなOBとして帰ってくる。年末に集まったり、フリースペースに集まってそこのメンバーと遊んだり、どこか第3の居場所みたいと言ってくれる。本人だけでなく親の居場所にもなっており、フリースペースなとりもそのような場所になってほしい。

午後0時1分 再開

○委員長（小野寺美穂） 再開いたします。

以上で本日の付議事件は全て終了いたしました。

本日は、これにて散会いたします。

大変お疲れさまでした。

午後0時2分 散会

令和7年8月25日

民生教育常任委員会

委員長 小野寺 美穂